

# 木 版 画 家 勝 平 得 之

## 一 作 品 と そ の 人 一

太 田 和 夫

### 作品について

#### 1. 初期の風景版画

風俗版画家といわれてきた勝平得之が最初に求めた題材は、彼の住む秋田市内の風景であった。

昭和4年、最初に試みた連作「秋田十二景」のなかの「外濠夜景」（図版1）「八橋街道」が日本版画協会展に初入選している。「外濠夜景」は、城跡のある千秋公園の外堀の夜景を描いたものである。丸ノミでややえ荒く削られた画面は粗雑な感じを与えるが、夜の空にはえる半月と水面に映る月あかりや家々からもれる灯などすべて地味な色彩でまとめ夜の風情を出している。翌5年「草生津川の秋」「鐘楼余景」と連作が続き、いずれも「外濠夜景」の表現形式をとっている。これら一連の風景版画は、昭和6年から「雪国の市場」「竿燈勢揃」の作品のように勝平独自のモチーフが徐々に固まっていくことから、わずか2年の短期間であるが、初期の造形センスをうかがい得る作品である。後年彼自身の語るところによれば、浮世絵版画に魅せられて版画を彫るようになったというが、やはり十二景の画面のところどころにその影響をみる事ができる。しかし、この影響よりもここでは、十二景の全作品に共通する渋い色彩、題材を身近なものに求めたことなどに注視すべきである。この2要素は、後年の作品の特色となっている。

「秋田十二景」以後、昭和8年から「千秋公園八景」を制作し、単発の作品としては昭和6年の「奥入瀬の秋」「十和田発荷峠」と続き、徐々に秋田市周辺から県内各地に彼の目が広がっていった。

この系列上の作品としては、昭和10年の制作「五月の街」（図版2）が上げられよう。雪国秋田のイメージの心理を逆手に利用し、スカイブルー1色で地面と屋根を表し、軒先の菖蒲のグリーンとあいまって五月の気持ちの良い街をものにしてしている。この作品は、昭和7年の「雪の街」（図版3）と好対照をみせている。後者のしんと雪のふる街や民話をもり込んだ郷土の色あいとは別に、雪に埋れる人びとの心象風景を見事にとらえている。また画面にみなぎる季節感と合掌造りの家や少女の服装にみられる地方色とが、他の版画のスタイルの根幹になっている。

#### 2. 秋田の風俗

昭和10年ごろから本格的な秋田の風俗への取りくみを始めている。この最初の連作として「秋田風俗十態」がある。「梵天」「彼岸花」（図版4）「草市」「笹笛」「犬コ市」「あねこ」「雛売り」「鹿鳥流し」「竿燈」「天神様」の題が示すように、宗教的行事とそれに関係したものの売り風物をとり上げた作品である。これらの作品に共通していえることは、登場する人物がすべて女性と子どもであること、彼女らの身につけている着物やかぶりもの、はきものを入念に描き込んでいることである。この特色は大半の作品に共通していることでもある。紺緋のモンペ、雪国にみられるソデボッチ、フロンキボッチと呼ぶかぶり物、ワラグツなどは、勝平の版画に多く出てくる。紺緋の藍、かぶり物の朱や赤、ワラグツの黄土、これらの色がおこなす画面が、郷土色にあふれた勝平という評価の要因であろうか。また他の風俗シリーズ「秋田風俗十題」のなかの「いろり」「かまど」「かきだて（雪囲い）」（図版5）にみられるように、画面を構成する上で不必要なまでに民具を描き込んでいる。彼のこのような対象への執着の強さと消えてゆく民俗資料への着眼のすばらしさには感嘆するが、反面、創作上の展開と画面が語る作家の思想的確に理解することの妨げとなっていたのではなからうか。従って個々の作品の分析する作業が、今後、勝平版画の全貌を知る上で早急にならなければならないことと考える。

前述の風俗シリーズの他に、彼が版画にした題材としては、「ナマハゲ」（図版6）「盆市」「豊年盆踊」「飾山囃子」に代表される年中行事もの、「米作四題」「農民風俗十二月」に代表される農民風俗ものが上げられる。年中行事に取材した作品は昭和6年ごろからすでに制作されている。また「造花」「七夕」「送り盆」「ナマハゲ」「竹打」などの大作が多く、勝平が年齢的にもちょうど意欲を見せはじめた時期の作品である。

昭和15年に制作された「ナマハゲ」は、男鹿半島に伝わるおもしろくまた奇異な風習を取り扱ったものだが、この特徴をうまく画面で成功させしている。画面は3つに分断され、中央には、ナマハゲが子どものいる家に訪れ

たところを描いている。青く澄みきった夜空には満月が浮かび、ナマハゲの入った後の門のあたりには、こわごわと身をのり出してのぞいている子どもたちがユーモラスに描かれている。左右の、鬼面やコモを身につけ包丁を手にもつナマハゲの克明な描写と、障子のかげから、ナマハゲが入ってくる様子をうかがう姉と弟の神妙な顔の描写とが、ナマハゲ風習をうまくあらわしている。画面の色彩は夜空の藍・月の青・雪の白・着物の混合色とが交錯し、門の雪囲い、天上につるされた干もちが、秋田の郷土色を強くしている。3つに分断された形式は、日本画の三幅対や宗教画の扉絵を思わせるが、ナマハゲの奇習を語るに適した形式とも考えられる。同形式の「竹打ち」とともに戦前の傑作といえる。

戦後に制作された「盆市」「豊年盆踊」「飾山囃子」は、いずれも勝平の意図が表れた作品である。「盆市」は、勝平が以前から好んで描く市場風景の集大成的な作品に位置づけられる。道端に広げられる売りものの季節感と宗教的行事の雰囲気とが、この種の作品の特色である。「豊年盆踊」「飾山囃子」は画面にムーブメントをもちこんだ意欲作である。勝平の版画には、ほとんど動的なものがなく静的な画面であるが、そのなかで動的要素をとらえた注目すべき作品であろう。

次に農作業に題材をとった「米作四題」「農民風俗十二ヶ月」は戦後24年からの制作になっている。稲作の風景は秋田の一大特色であることから、勝平の版画にはもっと早い時期にあらわれてもよいテーマであるが、昭和8年の「収穫」（これは農作業というよりは田園風景の描写である。）を除いては、以外にも後期に登場している。これは、彼が秋田市というまちに生まれ育ったこと、農作業の労働による動的イメージが彼の版画に不向きな要素であること、を考えておぼろげななづける。戦中「土に生きる」と題する映画のタイトルバックを制作しており、おそらく農民風俗ものは戦時中に構想されてたと考えられる。

「米作四題」は横132cm・縦40cmの横長の作品である。この点は、空間のひろがりや横に求めたこと、つまり農作業する人を左右の平行線上におき、労働の動きも左右の一線においていることからとられる形式であろう。彼の大作には、この形式が大半をしめている。この極端な横長形式は画面にやや散漫な感じを与えているが、「米作四題」の「堆肥運び」（冬）「耕土」（春）「田植」（夏）（図版7）「刈あげ」（秋）の季節感と、厳しい労働、土のにおい、リズムカルな動き、収穫の喜びなどの主題と、野良着の色調、雪の白、土の茶、苗の緑、稲穂の黄などの色彩とがうまくバランスをとり成功している。

「農民風俗十二ヶ月」は、1月の「わら打ち」から12月の「供米」までの12の農作業を描いている。3号ほどの小画面に集約されたいろいろな農作業は、機械化した現代の農作業からすると珍しく、単に記録するというだけでも意味深いものである。描き方は最も勝平らしいスタイルである。

### 3. 展開と終えん

県北鹿角市八幡平にある通称大日堂では、毎年正月になると、伝統的なしきたりを厳しく守って続けてきた舞楽祭が行われる。この宗教的儀式の色あいが強い行事は、県内各地にある年中行事の中において極めて壮厳である。舞を神前で行うまでの舞人たちの禁欲的生活は、修験僧に似ている。

勝平得之がこの行事に取材に出けたのは昭和10年であった。以後6年間年末年始には現地に取材している。版画の制作は昭和11年から15年まで墨刷りを手がけ、昭和15年から23年まで色刷りの版画8枚に没頭している。このテーマにかけた彼の執念は、残されたスケッチ帳に素描されている舞人の衣装、道具、堂内の様子、などの克明な記録からうかがい知ることができる。

色刷りの版画は、八点とも紺紙に刷られており人物だけを描きこむ簡略な図になっている。対象が舞楽であるため、舞楽の動きやリズム感と荘厳さを出すことによりかなり苦作したあとがうかがわれる。

一つの舞を1枚の紙に描いているが、構図上2つの舞を対にしている。「御常楽」と「権現舞」は横長の紺紙を用い、前者では人物と大龍神と呼ぶ旗の龍神頭とを結ぶ線が半円を描き、後者も獅子頭と獅子の尾をもつ人物とが半円を描いている。さらに対に並べると龍神頭と獅子頭が向い合い、両端に人物が配置され、二つの版画の中央へ動きの流れをもっていっている。この2点に限らず他の6作品においても、対の形式と左右ほぼ対称の構図とを見ることができる。「駒舞」「鳥舞」は、対に置くと舞人を結ぶ線が円を描き、舞の動きは時計方向に流れる。また駒舞は子どもがリズムカルに舞うところにポイントがある踊り方であるが、これを、上体のひねりや片足の折り上げでたくみに表現している。色彩は、青・赤・黄・白の四色と紺紙をうまく利用することによって鮮明であり、印象深い画面になっている。「五大尊舞」（図版8）「烏遍舞」（図版9）も、対にすると人物の並ぶ線

が逆三角形を描き、上部一辺の人物の色彩をぼかし、他の二辺に並ぶ人物を濃くし舞が行われる空間をうまく出している。またこの2舞楽は他の舞よりも雄壮なものだが、その雰囲気や顔につけた面や、肘の張りによって表現している。

これらの舞楽図は、一見しただけでは作画上の意図を理解できなかったが、実際に舞楽祭を調査することによって、構図・色彩・対幅形式を理解することができた。画面はできる限り簡略化されたものだが、勝平が6年間も調査しただけに、それぞれの舞の特徴を画面に反映させている。

またこの作品は、他の風俗・行事を扱った版画の中にあって異質な作品となっている。これは、大日堂舞楽という異なる対象を選んだこと（他の行事とは宗教的行事という点では共通しているが、その形式や内容においてかなり異質なものであること）、それによって、従来の風俗ものの描法では描ききれないこと（秋田的な服装や生活用具や風景を単に描くこと）などの要素から生じたと考えられよう。

勝平の秋田風俗をとらえた版画が、彼の最も得意とするスタイルであり、またそのスタイルが彼を存在たらしめる要素である。しかし、本版画という制約の多い画面において、マンネリズムと思われるほどの従来のスタイルを打破しようとした大日堂舞楽図の制作は、彼の芸術上の展開という意味で重視したい。ただ、この作品の延長線上に続くものとしては、昭和33年の「白童子」「赤童子」をみるだけであり、展開が結実せずに終わっている。残念なことに、昭和33年胃病をわずらい意欲的な制作ができなかったのである。

小康を得た昭和37年、新聞に掲載された彼の言葉に「これからは色のあざやかさを掘り下げていくとともに、静から動、個体から群像を強調する大きな作品を作りたいと思っているし、花売風俗十二題、農民風俗十二ヶ月のような連作にも力を入れるつもりです」とあり、大日堂舞楽の延長線上の作品と風俗版画の仕事が続ける決意を語っている。しかし、病には勝てず、小品を制作することに甘んじなければならなかった。

昭和46年1月4日勝平得之永眠。その折晴夫人が「今はなき夫の面影しのびつつ残せる作品を守らんとする」と詠んでいる。この意志は後に残った者の使命であり、さらに勝平得之と作品との研究を続けることが今後の課題である。

## ◇その人

### 1. 幼少年のころ

明治37年4月6日秋田市大町6丁目6番地19号（旧鉄砲町）に生まれる。本名は徳治。父為吉は紙漉業と左官業を営んでいた。職人気質の家に生まれたことが、後年版画を志望したことで地味な活動に深い影響を与えている。明治44年秋田市旭南小学校に入学する。彼自身の回顧によると、当時絵はうまくも好きでもなかったことになるが、少年期のスケッチや模写をみれば、版画家勝平得之を容易に想像できる。残されているスケッチが色彩を平面的に配置する描法と簡略な構図であることは不思議なことに版画に近いものである。大正5年12才の時、母スエ病死。この母の死は、絵の道に入るきっかけともなっているし、版画に女性が多く出てくることの原因とも推測される。大正7年14才の時、水彩画「白竜観音」を描く。これは仏画ののった本を見て描かれたと思われるが、14才の少年が選ぶ題材ではない。物心ついた少年が母の死に直面することによって宗教的なものへの志向が始まり、後の版画の題材ともなっている。大正8年中通尋常高等小学校高等科を卒業し家業の紙漉きを手伝う。大正10年には大阪に出稼ぎをしているが、そのかたわら写生を続けた。この時期流行の夢二の絵に魅せられ、夢二調のスケッチを残している。画家志望が強くなった時でもある。

### 2. 版画のはじめ

大正13年20才の時、はじめての木版画制作を試みる。この時、版木はゲタ屋から杓を求め、ノミはこうもり傘の骨を利用したというエピソードが残っている。版画制作に向かわせる直接の原因としては、山本鼎らの唱えた創作版画運動の思潮と徳治の生来の器用さがあげられる。このことは後年、絵・彫・刷の三工程を一人で行うことを繰り返し強調することから察せられよう。大正14年には「秋田十二景」の画題となった「草生津川の秋」などの市内風景をスケッチし始める。翌15年～昭和元年には「勝平庵石仏」と称し、地方紙にハガキ大の墨刷り版画を寄稿、以後5～6年間続けた。画題は竿燈祭りに取材した「七夕スケッチ」を始めとして、郷土の遊びや風物に取材したもの、「現夢」「浴前」などピカソやシャガールに影響を受けたものに大別される。昭和2年23才、色刷り版画の独学に励む。翌3年、木村五郎氏の指導をうけ風俗人形を制作し生活の一助とする。農民芸術運動

の影響をうけてか、この頃から秋田の風物・行事に深い関心を寄せるようになる。また、画号を得之と改め本格的な版画制作に向う。

### 3. 版画界デビューのとき

昭和4年25才の時、日本版画協会展に「外濠夜景」「八橋街道」を出品し初入選をとげる。翌5年久米晴と結婚、3点の版画入選。昭和6年帝展で「雪国の市場」、国画会展「雪国の村里」、日本版画協会展「奥入瀬の秋」、新興版画展「竿燈勢揃之図」「梵天奉納之図」、白日会展「聖園」、日本水彩画会展「十和田発荷峠」が各々入選。翌7年日本版画協会員に推せんされる。この頃から千秋公園八景を始め、秋田風俗十態、十題などの連作を構想し制作し始める。題材はすべて秋田の風俗・景観・行事に取材したものである。以後、太平洋戦争中2年間と晩年の一時期を除き、毎年展覧会に出品し、数々の入選を続けた。

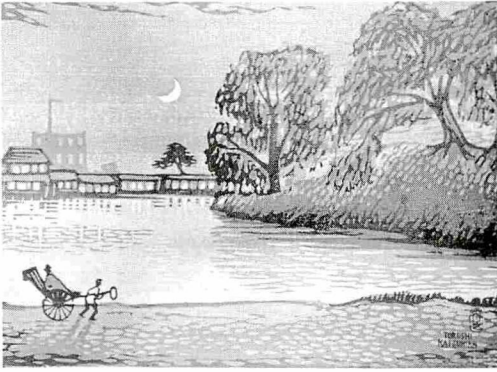
### 4. 芸術の展開へ

昭和10年31才の時、ドイツの建築学者ブルーノ・タウトが来県し知己を得、秋田市内の案内をつとめる。この年合掌造りの酒屋がある通りを描いた「五月の街」を制作している。また鹿角市八幡平の大日堂に舞楽祭を取材し以後6年間年末年始に出かけている。昭和15年大日堂舞楽図八部作墨刷りが完成、色刷りの制作に着手。翌16年東京銀座松坂屋で個展を開く。昭和17年38才の時、山形県鶴岡市に滞在し、羽黒山・湯殿山・月山の三山にまつわる宝永年代古版木を百部刷る。さらに県外に取材した唯一の作品「黄金堂和讃」を国画会展に出品、入選している。この頃、「土に生きる」と題した映画のタイトルバックや、「椽ノ木の話」（富木友治著）の挿絵を手がけている。昭和23年44才の時、日展委員となり、現代美術総合展に労作「大日堂舞楽図八部作」の内2点を招待出品する。翌24年「米作四題」の制作と、同じ農作業をモチーフとした「農民風俗十二ヶ月」とに着手する。昭和27年、米国太平洋沿岸部都市で開催された巡回美術展に出品、西ドイツのケルン博物館にも出品する。さらに長年続けてきた古版木研究を新聞に連載、戦後の健在ぶりを示している。昭和30年「祭四題」の制作に着手、その内の「たいまつ祭」が日展に入選。翌31年日展委嘱出品無鑑査に推せんされ「番楽」を出品。この年「日本の現代版画」（オリバー・スタットラー著）の中に作品が掲載され海外に広く紹介された。

### 5. 病を得てから

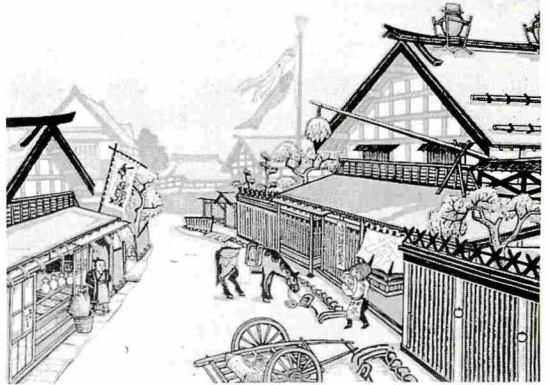
昭和33年、父為吉死去。得之も胃病のため入院。この年制作された「赤童子・白童子」が最後の大作となり、以後は小品の制作にとどまった。34年から制作された小品「花売風俗十二題」は花の色彩と背景の色彩をうまく配色し、季節感もあいまって好作品となっている。昭和36年、河北文化賞、38年、第8回秋田県文化功労章を受ける。昭和41年62才、胃病が悪化し手術を受ける、これ以後体力の衰弱が目立ち版画制作ができなくなる。昭和45年病氣再発、2年間の治療のかいもなく、昭和47年1月4日午後9時55分死去。享年67才。円熟期の10数年胃病のため思うような制作ができなかったことが惜まれる。

1. 外濠夜景



昭和4 22.6×29.6

2. 五月の街



昭和10 45.2×57.7

5. かきだて



4. 彼岸花 昭和18 29×40

3. 雪の街



昭和7 36.7×51.2



昭和10 39.8×29.8

6. なまはげ

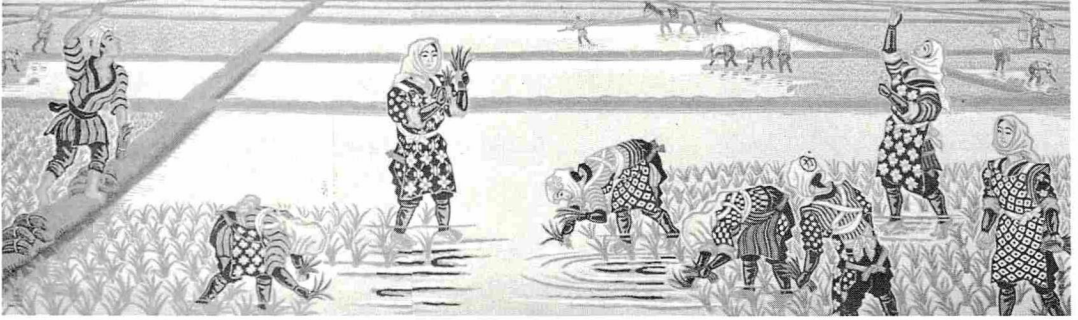


昭和15



39.7×67

7. 田 植



昭和25

39.8×134.8

9. 鳥遍舞



昭和19

69.3×39

8. 五大尊舞



昭和19

69.3×39